

Abstract

地球環境問題の安全保障化の限界と可能性

山田 高敬（名古屋大学教授）

本稿は、まず地球環境問題の「安全保障化」がどのような存立的脅威を想定して行われてきたかをレビューし、それが、資源・環境問題が戦争を引き起こすとする「資源戦争」仮説に基づいていることを明らかにした。そして、その「脅威防衛ロジック」が暴力の行使を正当化したり、資源管理のための国際協調を阻害したりする危険があることを、中東における水資源管理を例に指摘した。さらに本稿は気候変動問題への影響についても検討し、「安全保障化」が気候変動による存立的脅威への国際的な対応を促進した形跡がないことを示した。しかし気候変動による人的被害のレベルと各国の環境関連予算との関係を考察したところ、多くの途上国では人的被害の規模と環境関連予算との間に不均衡が見られたことから、本稿はこれらの諸国では「人間の安全保障」を前提とするSDGsの実施などを通して環境問題を「安全保障化」する必要があると結論付けた。

『国際安全保障』第45巻第3号（2017年12月）18–34ページ。